助成事業完了報告書

日本財団　会長　笹川　陽平　殿

報告日付：2019年4月15日
事業ID：2017458508
事業名：兵庫県尼崎市における第三の居場所（B）事業の運営
（兵庫県尼崎市・1年目）
団体名：特定非営利活動法人
ブレーンヒューマニティー
代表者名：理事長　松　本　　学　印
TEL：0798-63-4441
事業完了日：2019年3月31日

事業費総額	31,710,000円	収支計算書の黄のセルの値
自己負担額	0円	収支計算書の緑のセルの値
助成金額	31,710,000円	収支計算書の赤のセルの値。千円未満は切捨
助成金返還見込額	0円	（収支計算書の青のセルの値）

1. 事業内容
「家でも学校でもない第三の居場所」を整備し、子どもたちの社会的相続を補完する。同時に、貧困の連鎖に対する有効施策を特定する。

2. 事業内容詳細：
■兵庫県尼崎市における第三の居場所（B）事業の運営（兵庫県尼崎市・1年目）
・日　時　2018年3月20日～2019年3月31日
・場　所　兵庫県尼崎市内
・参加者　小学校低学年、20名
・内　容　「家でも学校でもない第三の居場所」をつくり、そこで社会的相続を補完する。拠点には専門スキルを備えたスタッフを配置し、子どもとの1対1の関係を重視しながら、子どもたちの生活習慣形成や学ぶ意欲向上を支援する。

3. 契約時事業目標の達成状況：
【助成契約書記載の目標】
(1) 拠点利用児童の募集
(2) 児童への居場所・読み聞かせ・学習支援・食事の提供
(3) 保護者・地域・行政との関係構築
(4) 全国展開に耐えうる事業モデルの構築

【目標の達成状況】

(1)拠点利用児童の募集

年　月	実　数	目　標
2018年12月時点	3名	2名
2019年3月時点	5名	5名

・2018年12月時点に定めた目標は無事に達成している状況である。
・開設当初に2名の利用希望者があり、どちらの対象小学校とも関係を持つことができた。
・利用児童について、対象小学校と月に一度、利用している児童に関するケース会議を行ってきた。その機会を通して、先生方との信頼関係を構築し、学校全体が拠点の利用についてご理解いただき、保護者に対する働きかけなどにご尽力いただいている状況になっている。
・また、対象小学校だけでなく、地域の母子自立支援施設とも連携を図りながら、運営ができたと考える。
・2018年12月、2019年3月にそれぞれ計3回の見学会イベントを実施した。
・チラシを作成し、対象小学校の教員の方々より気になる家庭の保護者に対してチラシを配布していただいた。
・いずれも、小学校からの情報提供をきっかけにつながったケースが多く、対象小学校の先生方と密に連携しながら児童の募集を進めることができていると考える。

(2)児童への居場所・読み聞かせ・学習支援・食事の提供

〇児童ごとの利用状況

利用者ID	入所年月	利用回数	小学校	利用日数	早退日数	欠席日数	入所経路
0001	2018/4	5日/週	B小学校	220日	2日	8日	・母子支援施設 ・小学校
0002	2018/5	5日/週	A小学校	174日	8日	34日	・小学校
0003	2018/12	5日/週	A小学校	52日	4日	9日	・小学校
0004	2019/3	5日/週	A小学校	7日	0日	0日	・小学校 ・市の担当課
0005	2019/3	5日/週	A小学校	6日	0日	0日	・小学校 ・市の担当課

【全体評価】

・どの児童も比較的安定的に利用していると言える。
・どの児童も、居場所を気に入っている様子がうかがえる。
・心地よく、過ごしやすい場所になっていると考えている。

【学習支援】

・学習支援は、主に宿題の補助を実施している。
・学習の開始時間を自分で決定し、時間になったら自分から学習に向かうことができるよう、サポートを実施している。
・児童によっては、宿題の量が少なかったり、復習が必要な単元・内容があったりする場合は、宿題以外の教材も適宜準備し、提供している。
・また、学校との会議の中で、学習面についても情報交換を行い、学習のようすや取り組み姿勢、拠点においてフォローしてほしい単元/内容についても共有し、学校と施設が協力して学習面のサポートを行えている状況にある。

【食事支援】

・毎日、18:30から利用児童・スタッフが食事をとっている。
・食事はスタッフがすべて手作りし、できる限り家庭の味に近い味付けを心がけて提供している。
・定食のように、1人前の量はあえて決めず、児童が自分の食べられる量を調整して配膳できるような機会を作っている。
・嫌いなものや苦手なものは大人から強要せず、児童のペースで克服することを狙いとしている。
・2018年12月ごろより、毎食の献立ごとに児童の食べた量や味の好み、人気の高いおかずなどをスタッフが記録している。
・食事の記録を参考に、苦手なものであっても少しでも食べやすいよう、調理方法や味付けなどを調整しながら提供している。

【参考】施設での様子（行事）

〇ハロウィンの飾りつけのようす

〇年賀状の作成

〇誕生日会のようす

〇節分・恵方巻づくりのようす

⑶ 保護者・地域・行政との関係構築

【保護者】

・保護者との連絡手段の一つとして、連絡帳を採用している。
・その日の児童の体調や変わった様子、土日の間の家族での出来事、その日のお迎え時間などの記入項目がある。
・特にネガティブな情報や重要な報告内容については、お迎えの際に真っ先に口頭で報告し、その後、それ以外のその日の様子や出来事を伝えるようにしている。
・また、利用児童の保護者とは、原則として月に1回の定期面談を実施している。
・普段、お迎えの際にはできないようなお話をしている。
・利用児童に関する悩みや相談はもちろん、保護者自身や児童以外の家族のことに関する相談まで、幅広く相談を受けている。
・中には、当施設の対応に関するお叱りや改善点の指摘などもいただくことがある。
・その際は、すぐに謝罪/御礼の言葉を述べて、同じことが起こらないよう、改善できるようスタッフへの報告、対策の検討を行っている。

【地域・学校】

・対象小学校との関係性づくりは、順調に進められている。
・また、地域の母子自立支援施設や相談事業所等とも、ケース共有の機会をいただく機会があり、いくつかの事業所さんとは連携することができている。

【行政】

・窓口となっている担当課とは、月に一度定例会議を実施し、利用児童のケース共有や児童募集のための働きかけについて協議を重ねている。
・市職員で主に、ケースワーカーや家庭児童相談員、その他困難な状況にある子どもたちに関わる職員の方を対象とした、勉強会を開催し、活動内容や児童の様子、変化についてお話する機会をいただいた。
・また、経済的な理由で文化資本が不足している子どもたちのために、演劇を無料で鑑賞させていただけるような機会もいただき、2018年8月に演劇鑑賞に参加した。（1名）

(4) 全国展開に耐えうる事業モデルの構築

【居場所運営】

・日常の運営については、スタッフの経験をもとに採用を行った。
・毎日、1名以上は教員や保育士、学童支援員等の有資格者を配置し、運営を行ってきた。
・また、日常のようすや利用児童に関わる気になるやり取りを記録として残し、月に一度スタッフ全員でケースへの対応や運営方針について検討した。
・開設当初は、一定の有資格者や経験値のあるスタッフが運営に携わる必要があるように感じる。

【関係性づくり】

・地域や学校との関係性作りについては、それぞれの地域でようすが違うので、マニュアルのみでの全国展開は難しいと考える。
・関係性作りについては、すでに開設して運営している拠点のマネージャーがOJTによる引継ぎが必要であると感じる。
・関係性づくりを進める上で、体系的に検討していく枠組み（ベースとなる考え方）をノウハウとして共有する必要がある。
・地域や学校との関係づくりのポイントやこれまでの取り組みで成果を挙げたことをまとめておく必要はある。

4. 事業実施によって得られた成果：

(1) 児童のようすの変化（例）

利用開始直後	利用開始（2019年3月時点）
・勉強を特に毛嫌いしており、「宿題がない。」とウソをついてまで避けようとしていた。	・来所後、スタッフの声掛けなしに宿題を開始し、宿題以外の学習にも自ら取り組むようになった ・長期休みの宿題を、閉所日の週末に自宅で取り組んできた。
・家庭でのストレスが非常に高い ・よい子を演じようとする	・家庭や学校では見せない言動が多くみられる。 ・家族にも自分の考えや意志を伝えられるようになった

(2) 保護者のようすの変化（例）

利用開始直後	利用開始（2019年3月時点）
・あくまでも保護者中心の考え方・理想を子どもにあてはめようとしていた。 ・大人の都合を感じ取り、児童自身も素直に聞けない、感情的な会話が多かった	・自身の都合ではなく、子どもを中心に考えることができるようになった。 ・その結果、児童との会話のようすが変わり、親子の会話や関係性があたたかな雰囲気に変化した

(3) 学校や関係機関とのつながり

・対象小学校と月に1回程度、ケース会議を行い、利用児童に関する情報交換を行った。
・また、夏休みには教員研修の一環として、20名ほどの先生方に施設見学をしていただくこ

とができた。
・それにより、多くの先生方に実際の現場を見ていただき、実際に学級で児童や保護者と直接かかわる担任レベルの先生方にもより深く知っていただくこととなった。
・その結果、担任をもつ先生方が必要なご家庭に声をかけていただけるようになり、12月以降の利用者獲得の基盤につながった。

5.成功したこととその要因：
(1)児童のようすの変化
・児童の利用人数や児童との相性を鑑みて、スタッフを配置することができた
・開所日には、必ず1名以上の有資格者を配置して運営を行った
・基本的な児童とのかかわり方について、スタッフ会議で共有し、その都度改善しながら進めることができた
・児童の気になる言動について、すぐに記録をすることで、正確な情報とその時々に合わせた柔軟な対応ができた

(2)保護者のようすの変化
・SW/施設スタッフを交えた定期的な面談の実施（月に1回）
・連絡帳による利用児童に関する情報共有
・利用家庭の家族の夕食利用制度の整備
→お迎えや面談時には出ないような会話が出てくる。子育てママならではの悩みに、先輩ママのスタッフからのアドバイスができた

(3)学校や関係機関とのつながり
・定期的な情報共有（ケース会議）の設定
・ネガティブな情報であっても、即座に報告書とともに報告、対応に関する検討

6.失敗したこととその要因：
〇対象小学校との関係性づくり
・対象校区となる小学校が2校あるが、一方の小学校とはそれぞれの利用児童の様子や保護者対応、児童募集など、連携しながら幅広く取り組むことができている。
・その一方で、もう一つの小学校とはほとんど関係性を構築するに至らなかった。
・学校側の理解がなかなか得られなかったことがその要因として挙げることができる。利用児童についての情報交換について、担任は前向きな様子ではあったが、学校長や教頭などの管理職の先生方からの信頼や協力が得られなかったことが要因だと考える。

→2019年3月末に管理職人事に変更があったため、再度アポイントをとり、事業説明をさせていただき、現在の利用児童についてのケース会議が実施できるような体制をとりたいと考えている。

7.活動を通じて明らかになった新たな課題と対応案：
・現在のところ、特になし。

事業成果物:
【成果物の名称】

【成果物がアップロードされているCANPANのURL】